

中年期夫婦における夫婦関係満足度と妻理解・平等主義的性役割観の関連

岡本祐子・村田朋子

The relationship between marital satisfaction and respect for wife in middle aged couples

Yuko Okamoto and Tomoko Murata

本研究は、中年期夫婦 90 組を対象に、夫婦関係満足度と妻理解・平等主義的性役割観の関連を検討した。夫婦関係満足度の高い高満足度夫婦では夫婦間の満足度に性差がみられなかったのに対して、低満足度夫婦では妻の方が夫より有意に満足度は低かった。また高満足度妻においては、心理的な機能や結びつきを中心とした結婚となっているのに対して、低満足度妻では道具的機能が中心の結婚であることが示唆された。夫の妻理解が高い場合、夫婦関係満足度が高い夫の方が低い夫より、平等的な性役割観を有していることが示された。

キーワード：中年期夫婦、夫婦関係満足度、妻理解、性役割観

問題および目的

近年、夫婦関係満足度（以下、満足度と略記）に関して男女間にギャップがあることが示唆されている（柏木ら、1996）。このギャップは結婚後 5 年以下では生じないが（菅原ら、1997）、子どもの誕生後の満足度は、夫では以前と変わらないのに対して、妻では有意に低下し（堀口、2000）、中高年層ではさらに、夫と妻の満足度に大きな差が生じている（柏木ら、1996）。離婚の 7 割が妻側からの申し立て（最高裁判所、1995）であることから、妻の方が既存の結婚に不満を抱いていることは明らかであろう。中高年期における熟年離婚では、夫にとっては離婚の申し立ては青天の霹靂というケースも少なくないようである。

従来、わが国では伝統的な性役割分業が主流であり、それは生きるための方策であった。男性は妻に家事万端を任せ、心身の安定の場を整えることを、女性は夫に収入の獲得を依存し、それぞれの不足分を補い合い生きていくことが結婚であり、最適な性別分業のかたちであった（柏木、2003）。しかし家事労働の機械化・簡便化や、女性の高学歴化や社会進出の進んだ現代において、性別分業は最適なかたちとは言えなくなっている。柏木ら(2003)は、女性の側でこれまでにない結婚・夫婦関係のあり方を志向する傾向が強まっていると推測している。具体的には、性役割にとらわれず、夫婦の対等性を前提とする平等主義的なあり方、精神的機能を重視するありようである。

それでは現代社会における結婚・夫婦関係の実態はどうであろうか。家事・育児分担に関する平山(1999)の研究によれば、妻の就業に関わりなく家庭内役割の遂行はいまだ女性に大きく偏っている

る。また育児期の夫婦では、妻の方が夫に比べて配偶者への情緒的ケアをより多く行っていること、男性の方が夫婦関係から多くの情緒的サポートを得ていること(稲葉, 2002)も明らかにされている。これらの研究は夫婦間の情緒的交流が対等かつ相互的に行われていない実態を浮き彫りにしている。こうした結婚の実態が、女性の理想とする結婚とずれているため、妻の不満感へとつながっていく可能性は十分考えられる。

さらに末盛(1999)は、夫が妻を情緒的にサポートすることが、家事遂行以上に、妻の満足度に大きな影響を持つとしている。実際に家事を遂行し、相手の負担を減らすのではなく、心理的にサポートすることが満足度に良い影響を与えることは興味深い。

柏木・平山(2003)は、中年期夫婦を対象に、平等・相互的な情緒的交流がどの程度実現されているか、それが夫婦関係の満足感にどのような影響をもつか、という点について調査している。その結果、満足度については、夫では「相思相愛」、「夫への理解・支持」が行われているほど、逆に「妻への理解・支持」が行われていない(と認知する)ほど、満足度が高かった。一方、妻では「相思相愛」であると認知することのみが、満足度に関連していた。「妻への理解・支持」が高くても妻の満足度が上がらない理由は、夫ではこれが行われているほど、満足度が低下する傾向が見られることに関連していると推測される。

また末盛(1999)は、夫が妻を情緒的にサポートすることが、(家事遂行以上に)妻の結婚満足度に大きな影響を持つとしているが、自分の家事労働を配偶者からどう認知されているか、ということも満足度に関わってくるのではないだろうか。さらに柏木(2003)によれば、女性の側にこれまでにない結婚・夫婦関係のあり方を志向する傾向が強まっているが、夫はどうなのだろうか。

「妻への理解・支持」が高まるというのは、女性の新しい結婚に対応していると考えられる。しかしその結果、「妻への理解・支持」が高まるほど、夫は、夫婦関係満足度が低下する傾向にあることは、妻の生き方は認めつつも、本質的には伝統的な性役割観にとらわれている可能性も推察される。

以上より、本研究では以下の3つの問題を検討することを目的とした。

- ①妻の満足度が低い中年期夫婦の割合の実態、及びそれに該当する夫婦と該当しない夫婦の特徴。
- ②家事労働に対する相手からの評価・認知と、夫婦関係満足度の関連性。
- ③「妻への理解・支持」が高くなるほど、夫は満足度が下がる傾向にあることから、「妻への理解・支持」が高く夫婦満足感が高い夫は、同様の夫で夫婦満足感が低いものより平等的な性役割観をもっているという仮説について検討する。

方 法

調査対象者 中年期夫婦 90 組、夫の平均年齢は 51.9 歳 (40 歳～65 歳, $SD: 4.64$)、妻は 49.6 歳 (39 歳～62 歳, $SD: 4.28$) であった。平均結婚年数は、24.7 年 (16 年～32 年, $SD: 4.29$) であった。妻の就労形態は、パートタイム 47.8%、フルタイム 31.1%、専業主婦 15.6%、自営業 5.5% であった。

調査方法 広島県内の大学生の両親を対象者に、郵送法による質問紙調査を実施した。対象者の

在住地は西日本全域にわたっていた。夫・妻ともに回答が得られた 93 組のうち、質問項目の 9 割以上に回答が得られた夫婦 90 組を分析の対象とした（回収率：80.9%，有効回答率 78.3%）。調査時期は、2005 年 11 月であった。

調査内容 ①家事育児と就労(経済)活動：家事育児と就労活動ではどちらが楽に思えるか、との問いに、「家事育児が大変楽」から「収入を得る方が大変楽」まで 5 件法で回答を求めた。②妻の経済力：妻の経済力を問う項目は、柏木・平山(2003)を踏襲した。③妻への理解・支持：柏木・平山(2003)による、結婚の“現実”：結婚・夫婦関係の現実と理想の様態を問う質問項目 24 項目、④平等主義的性役割態度：鈴木(1994)による、平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)20 項目、⑤夫婦関係満足度：諸井(1996)による、夫婦関係満足尺度 6 項目、⑥文章完成法：「私にとって夫(妻)は」、「夫(妻)にとって私は」、「家事育児とは」、「収入を得ることは」、「結婚生活を続けてきたのは」、「私達夫婦はこれから」の 6 項目、⑦フェイス項目：年齢、結婚年数、職業。なお②と⑦の職業については、女性の対象者のみ記載を求めた。またプライバシー保護の観点から、調査は無記名で行った。

結 果

1-1 夫婦関係満足度の数量的分析

表 1 に夫婦関係満足度得点の結果を示した。項目 5 においてのみ、妻の得点が夫より有意に低かったものの、それ以外には性差はみられなかった（表 1）。

表 1 夫婦関係満足度得点の夫婦間比較

項目内容	夫 (N=92) M SD	妻 (N=90) M SD	t 値
1. 私達は申し分のない結婚生活を送っている	3.13 .58	2.99 .68	-1.53
2. 私と夫(妻)の関係は、非常に安定している	3.08 .62	3.07 .70	-1.21
3. 私達の夫婦関係は強固である	3.09 .64	2.96 .77	-1.15
4. 夫(妻)との関係によって、私は幸福である	3.31 .63	3.14 .80	-1.60
5. 私は、まるで自分と夫(妻)が同じチームであると、本当に感じている	3.09 .69	> 2.82 .93	-2.17*
6. 私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	3.30 .56	3.19 .76	-1.17
夫婦関係満足度得点 (1~6 の合計得点)	18.96 3.22	18.13 4.10	-1.07

* $p < .05$

次に、夫婦の満足度合計得点の平均値 37.07 より、 $1/2 SD$ 以上を高満足度群、 $1/2 SD$ 以下を低満足度群として 2 群に分類した。両群の夫婦関係満足度の各項目の平均値の差の検定を行った結果、高満足度群においては、性別による差はみられなかった（表 2）。一方、低満足度群では、全項目において、妻の方が夫より有意に低かった（表 3）。

表 2 高満足度群における夫婦関係満足度の男女比較

項目内容	夫 (N=21)		妻 (N=21)	t 値
	M	SD	M	
1. 私達は申し分のない結婚生活を送っている	3.71	.40	3.62 .50	.642
2. 私と夫（妻）の関係は、非常に安定している	3.71	.46	3.67 .48	.326
3. 私達の夫婦関係は強固である	3.76	.44	3.67 .48	.670
4. 夫(妻)との関係によって、私は幸福である	3.90	.30	3.90 .30	.000
5. 私は、まるで自分と夫（妻）が同じチームであると、本当に感じている	3.67	.69	3.62 .93	.315
6. 私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	3.81	.56	3.86 .76	-4.05
夫婦関係満足度得点（1～6の合計得点）	22.57	1.96	22.33 1.71	.419

表 3 低満足度群における夫婦関係満足度の男女比較

項目内容	夫 (N=22)		妻 (N=22)	t 値
	M	SD	M	
1. 私達は申し分のない結婚生活を送っている	2.68	.65	> 2.18 .59	.68*
2. 私と夫（妻）の関係は、非常に安定している	2.59	.59	> 2.23 .53	.15*
3. 私達の夫婦関係は強固である	2.64	.58	> 1.95 .38	.53***
4. 夫（妻）との関係によって、私は幸福である	2.91	.61	> 2.11 .62	4.30***
5. 私は、まるで自分と夫（妻）が同じチームであると、本当に感じている	2.68	.65	> 1.77 .61	4.79***
6. 私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	2.98	.55	> 2.32 .72	3.44**
夫婦関係満足度得点（1～6の合計得点）	16.48	2.99	> 12.48 2.33	4.90***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

さらに高満足度群，低満足度群の特徴をつかむため，男女それぞれを満足度の平均値から， SD の値の相違別にまとめた（表4）。 $+1SD$ 以上を「高群」， $+1/2SD \sim +1SD$ を「微高群」， $-1/2SD \sim +1/2SD$ を「普通群」とし， $-1/2SD \sim -1SD$ を「微低群」， $-1SD \sim -2SD$ を「低群」， $-2SD$ 以上を「超低群」と定義する。表4に示したとおり，超低群に属するのはいずれも妻であった。また，高満足度群は，夫婦間で満足度の差がみられなかったこと，低満足度群では，夫に比べて妻の満足度が有意に低かった（表2，表3）ことより，中年期夫婦は妻の満足度が低い，というのは低満足度群においては該当するものの，高満足度群においては該当しないことが示された。

表4 夫婦関係満足度の平均値からのばらつき（人数分布）

	$-2SD$ 以上 (超低群)	$-1SD \sim -2SD$ (低群)	$-1/2SD \sim -1SD$ (微低群)	$-1/2SD \sim +1/2SD$ (普通群)	$+1/2SD \sim +1SD$ (微高群)	$+1SD$ 以上 (高群)	計
夫(人)	0	8	8	44	11	17	88
妻(人)	4	12	10	33	17	14	85

1-2 夫婦関係満足度の質的分析

次に夫婦関係満足の特徴を質的に検討するため，低群妻16名とその夫，高群妻14名とその夫によるSCT反応内容を表5～表8にまとめた（ここでは超低群妻4名と，低群妻12名とを併せて「低群妻」とする）。SCT6項目のうち，「家事育児とは」「収入を得ることは」の項目においては，低群，高群による違いは顕著にみられなかった。妻を基準としたのは，高満足度群では満足度に性差がみられなかったのに対し，低満足度群では通説どおり，妻の満足度が低いという結果になったこと（表2・表3），離婚の申し立ての7割は妻側から（最高裁判所，1995）であることより，中年期夫婦においては“妻”の感情がより重要な意味を持つと考えられるからである。

表5は，SCT「私にとって夫（妻）は」という刺激項目に対する反応内容である。高群妻の場合，全体の50%に当たる7名が，夫のことを，「唯一のパートナー，かけがえのない存在」と表現していた。それに続き「大切なパートナー，良きパートナー」との反応もみられた。高群妻の夫は，妻のことを，「不可欠のパートナー，かけがえのない存在」等で表現している者が4名，「良きパートナー」が3名，「チームメイト」という言葉が2名にみられた。一方，低群妻の場合，夫に対して，「生活の安定，生活資金を出せる人」という反応，「共同生活者」との反応が3名ずつにみられた。その他「よく怒るし一緒にいて楽しくない，自分だけが大事な人，困った人」「特別な人ではない，暇つぶし相手」といったネガティブな反応が4名にみられた。低群妻の夫は，妻のことを「良い人」，「大事である」，「宝」など総じてポジティブに受け止めている反応が多かった。

表6は，「夫（妻）にとって私は」という刺激項目に対する反応内容である。高群妻は，夫にとって自分は，「1番である，かけがえのない存在であってほしい」等の言葉を使用する人が一番多く，続いて「必要な人でありたい」，「良きパートナー」，との反応がみられた。高群妻の夫は，妻に

とって自分は、「かけがえのないパートナー、人生最良の人」といった反応が妻同様に最も多く、続いて「頼りになるパートナー・良い夫」という反応がみられた。一方、低群妻においては、夫にとって自分は、「家のことをする人・家政婦」といった表現が最も多く 5 名にみられた。また「どう思われているかわからない」、「どうでもいい存在・バカな奴だと思っているかも」と総じてネガティブな反応となっていた。低群妻の夫は、妻にとって自分は、「?、どうだろうか」等が最も多かった。また「なくてはならない存在だ・良いパートナー」との反応がみられる一方で、「経済的支援者・厄介者」といった反応もみられた。

表 7 は、「結婚生活を続けてきたのは」という刺激項目に対する反応内容である。今まで結婚を続けてきたことを、高群妻は、「お互いを尊重しあってきたから・信頼しあってこれたから・お互いに愛情があったから」という表現がみられた。高群妻の夫は、「自然にいつの間にか・幸福のため・良かった」とそれぞれ 2 名ずつが表現していた。一方低群妻は、半数を超える 8 名が、「子供がいたから、子供の幸せのため」と「子供」という言葉を使って表現していた。低群妻の夫は、「なんとなく、特に問題もないため」等が最も多く 4 名にみられた。その他「連帯感、互いの愛情、妻がいたから、幸福である」との反応もみられた (表 7)。

表 8 は、「私達夫婦はこれから、」という刺激項目に対する反応内容である。これから先の将来を、高群妻は「仲良くやっていきたい、助け合いながら一生夫婦です」等の反応がみられた。高群妻の夫は、「今までと同じように過ごさだろう」、「死ぬまで一緒」との反応がそれぞれ 4 名ずつにみられた。低群妻の場合は、「どうなるかは分からない」や「子供が成人してからも夫婦でいられるかは分からない・どうかしなくては」との反応がみられた。低群妻の夫は、「未永く幸福に暮らします」、「楽しく仲良く暮らしたい」、「良い老後を送りたい」との反応がみられた。

表 5 SCT「私にとって夫(妻)は」の反応内容の 4 群比較

高群妻 (N=14)	「唯一のパートナー・1番である・かけがえのない存在」等 (7名) 「大切なパートナー・良きパートナー」(3名) 「仲間」、「最大の理解者」、「安心できる存在」、「空気」(各1名ずつ)
高群妻の夫 (N=14)	「不可欠のパートナー・かえがえのないパートナー」(4名) 「良きパートナー」(3名) 「チームメイト」(2名) 「私自身」、「人生最良の人」、「空気」、「大切な人」、 「よくケンカをするが、代わる人はいないであろう」(各1名ずつ)
低群妻 (N=16)	「生活の安定、生活資金を出せる人」(3名) 「共同生活者」(3名) 「何か問題があった時頼りたい」(2名) 「特別な人ではない」、「暇つぶし相手」、「困った人です。別れるつもりはないけれど」 「よく怒るし一緒にいて楽しくない、優しい人と結婚したかった」 「理想としていた人とは程遠かった。自分だけが大事な人だった」 「チームメイト」、「パートナー」、「家族です。保護者です」 「無記入」(各1名ずつ)
低群妻の夫 (N=16)	「良い人、良いパートナー」(3名) 「空気」(3名) 「かけがえのない人(女性)」(2名) 「いないと困る」、「大事である」、「宝です」、「うるさい人」、「無記入」(各1名ずつ)

表6 SCT「夫(妻)にとって私は」の反応内容の4群比較

高群妻 (N=14)	「1番である、かけがえのない存在、(またはそうあってほしい)」(4名) 「必要な人でありたい」(3名) 「良きパートナー」(2名) 「遠慮なく自分の弱い面を出して、わがままを言える相手である」(2名) 「仲間」、「?」、「安らぎの人でありたい」(各1名ずつ)
高群妻の夫(N=14)	「かけがえのないパートナー、人生最良の人」(3名) 「頼りになるパートナー」(2名) 「良い夫である」(2名) 「チームメイト」(2名) 「とりあえず夫、可もなく不可もなし」、「大きな子供」、「私自身であってほしい」 「結婚して良かった人でありたい」(各1名ずつ)
低群妻 (N=16)	「家のこと!をする人、仕事以外の全てのことをする人、家政婦」(5名) 「どう思われているか分からない」(3名) 「同志」(2名) 「どうでもいい存在だと思う、しかしなければ困る」、「放っておいても大丈夫な人」 「妻であるみたい」、「共同生活者」、「バカな奴だと思っているかも」(各1名ずつ)「無記入」(2名)
低群妻の夫(N=16)	「?、どうだろうか」(3名) 「空気」(2名) 「パートナー」(2名) 「必要だ」「柱」「頼れる存在である」「なくてはならない存在だ」「良いパートナー」、 「共同生活者」「経済的支援者」「厄介者」(各1名ずつ)「無記入」(2名)

表7 SCT「結婚生活を続けてきたのは」の反応内容の4群比較

高群妻 (N=14)	「お互いを尊重しあって認め合って、楽しく毎日を過ごしてこれたから」(3名) 「信頼のおける相手だったから、お互いを信頼してこれたから」(3名) 「あつという間だった、それが自然だった」(3名) 「多少の遠慮、我慢」(2名) 「お互いの全てを丸ごと受け止めて絆を深めてきたからだと思う」、 「夫婦円満で子供が可愛かったから」「お互いに愛情があった」(各1名ずつ)
高群妻の夫(N=14)	「自然にいつの間にか、これからも」(2名) 「幸福のため」(2名) 「よかった」(2名) 「子供を育てることが大切であると思っているから」「お互い馬が合うから」「和」 「お互いを認め合ってきたから」「妻のおかけかかな!」「お互いが我慢したこと」 「結婚当初と同じ気持ちで歩いてきたから」「お互いの信頼があったからだと思う」 (各1名ずつ)
低群妻 (N=16)	「子供がいるから、子供の幸せのため」(8名) 「忍耐あるのみ」(2名) 「始めたことは最後まで責任を持つため」「歴史のなせる業」「仕方がないから」 「止めるような問題もないから」「収入力がないから」「無記入」(各1名ずつ)
低群妻の夫(N=16)	「なんとなく、特に問題もないため」(4名) 「子供がいたから」(3名) 「よくわからない」(2名) 「妻子供への愛情と責任」「連帯感」「意義のある人生を送りたいから」「互いの愛情」 「妻がいたから」「幸福である」「無記入」(各1名ずつ)

表8 SCT「私達夫婦はこれから」の反応内容の4群比較

高群妻 (N=14)	「仲良くやっていきたい」(5名) 「助け合いながら一生夫婦です」(4名) 「ゆっくりと楽しみたい」(3名) 「何年先もお互いを尊重しながら続いていくだろう」(2名) 「いたわりあえる老夫婦になりたい」(1名)
高群妻の夫(N=14)	「今までと同じように過ごさだろう」(4名) 「墓場まで同じ道を歩んでいきます, 死ぬまで一緒」(4名) 「末永くいきたいが, 先はどうなるかは誰にも分からない」「うまくいくだろう」 「元気で長生きしたいと思う」「末長く一緒です」「子供の成長が楽しみだ」(各1名)
低群妻 (N=16)	「今までと同じように生活していく」(4名) 「どうなるかは分からない」(2名) 「よく話し合い, それぞれを見直し, 考え直さなければならない。」(2名) 「子供をお嫁にやり夫婦喧嘩しながら過ごすと思う」 「子供に在る間は夫婦でいられるが, 子供が成人してからの人生はみえていない。毎日子供がいるから帰っているようなものだから」「お互いに助け合うこと」 「死が二人を分かつまでいくでしょう」「どうにかしなくては,,」 「互いに干渉せず, 今しかできないことをする。それを互いに敬う」 「仲良く老後を過ごすことに努める」「無記入」(各1名ずつ)
低群妻の夫(N=16)	「末永く幸福に暮らします」(3名) 「楽しく仲良く暮らしたい」(2名) 「良い老後を送りたい」(2名) 「どうなるか分からないが良い方向へ向かえばいいと思う」「現状維持」「?」「老人」 「リタイヤ後の生活を共に送っていくだろう」「出発点」「喧嘩をする」(各1名ずつ) 「無記入」(2名)

2. 家事育児活動の認知と夫婦関係満足度

情緒的サポート同様、配偶者からの評価も、夫婦関係満足度に影響すると考えられる。ここでは家事労働に対する配偶者からの評価と、夫婦関係満足度の関連を検討した。

本研究では、夫婦それぞれが負担している家事育児活動の割合を、夫婦それぞれに質問した。その夫婦間のズレを基準に、「自分が評価した割合より配偶者が高く記入している」、その逆に「自分が評価した割合より低く記入されている」、そして「ズレが全くみられない」夫婦の3群に分類した。これらをそれぞれ「高評価群」、「低評価群」「評価一致群」とした。なお「評価一致群」は、お互いの評価が完全に一致していたカップルのみを示す。それぞれの人数分布は表9の通りである。

この3水準で、夫婦関係満足度合計得点を従属変数とした一元配置分散分析を行ったところ、有意差が認められた [$F(2,173)=5.15, p<.05$] ため、下位検定 (Tukey 法) を行ったところ、「低評価群」と「高評価群」、「低評価群」と「評価一致群」において、有意差 (共に $p<.05$) が認められた。図1に示したとおり、「評価一致群」が最も夫婦関係満足度が高かった。

表9 家事育児に占める割合の認知と夫婦関係満足度

	①低評価群 (N=78)	②高評価群 (N=68)	③評価一致群 (N=30)	有意差検定
夫婦関係満足度得点				
<i>M</i>	17.67	19.18	19.87	③>①, ②>①
<i>SD</i>	3.26	4.36	3.76	共に $p<.05$

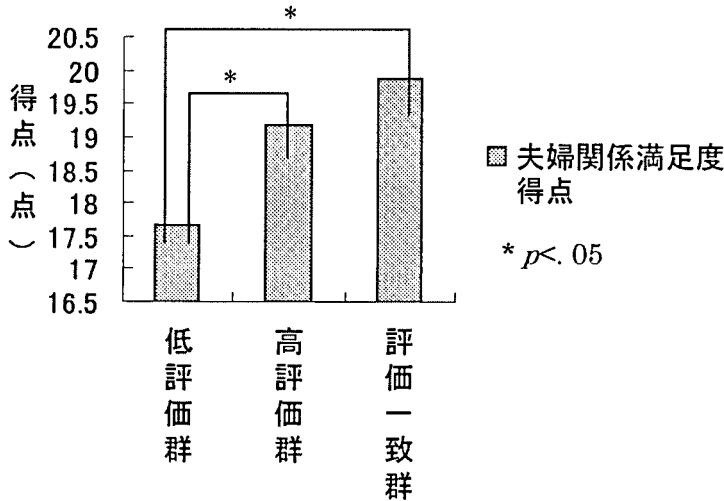


図1 配偶者の負担度評価と夫婦関係満足度

3. 夫の「妻への理解・支持」, 「夫婦関係満足度」と平等主義的性役割態度

夫は、「妻への理解・支持」が高まるほど、夫婦関係満足度が低下する傾向にあることが報告されている(柏木・平山, 2003)。それは自分の妻の生き方は認めつつも、伝統的な性役割に捉われている可能性が強いためと考えられる。よって、以下の手続きでこの仮説を検討した。

なお、専業主婦の妻をもつ夫と、フルタイム労働者の妻をもつ夫では、具体的な妻への理解・支持内容は異なるかもしれない。しかし「妻への理解・支持」尺度は、「平等主義的性役割態度」尺度とは異なり、妻を一人の人格として理解・支持するかという意味合いを持つ。換言すれば、妻を従属的に扱うかどうかであり、その点においては専業主婦の夫も、フルタイム労働者の夫も変わらないはずである。したがって本研究では、全ての男性を対象者として分析を行った。

男性のみを「妻への理解・支持」の平均値得点(10.24点)より高いか低い、「夫婦関係満足度得点」の平均値得点(18.86点)より高いか低いかで以下の4群に分類した(図2)。それぞれの人数分布は表10に示した。

- ① 「妻への理解・支持」が低く、「夫婦関係満足度得点」が低いもの: 「低理解・低満足型」,
- ② 「妻への理解・支持」が高く、「夫婦関係満足度得点」が低いもの: 「表面的理解型」,
- ③ 「妻への理解・支持」が低く、「夫婦関係満足度得点」も高いもの: 「伝統的性役割観型」,
- ④ 「妻への理解・支持」が高く、「夫婦関係満足度得点」も高いもの: 「新・性役割観型」と定義した。

平等的性役割態度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行ったところ、 $F(3,88)=.296, p<0.5$ であった。引き続き下位検定(Tukey法)を行ったところ、「表面的理解型」と「新・性役割観型」で有意差が認められた。図3に示したとおり、「新・性役割観型」が一番平等的な性役割観を有していた。

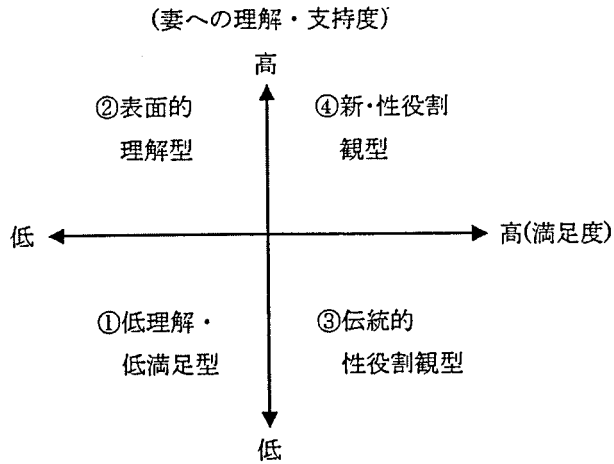


図2 「妻への理解・支持」高低と「満足度」高低の2次元配置図

表10 平等主義的性役割態度得点の群別平均値比較

	①低理解・低満足型 (N=34)	②表面理解型 (N=17)	③伝統的性役割観型 (N=16)	④新・性役割観型 (N=25)	有意差 検定
平等主義的 性役割態度得点					
<i>M</i>	64.71	60.15	63.69	71.32	④>②
<i>SD</i>	10.73	12.67	12.86	14.08	$p < .05$

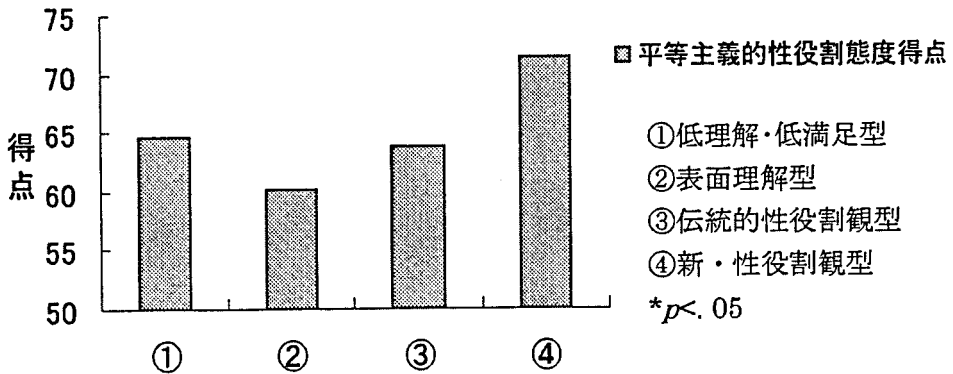


図3 平等主義的性役割態度得点の群別比較

表 11 SCT「家事育児とは」の反応内容の群別比較

表面理解型 (N=4)	新・性役割観型 (N=9)
「家庭の中では最も大切なもの」	「夫婦の協力で成り立つもの」(3名)
「何とかこれまでやってこられた」	「家族全員で取り組むもの」(2名)
「各々の性に応じた分担がある」	「人生での大切な一部分である」
「共同作業」(各1名)	「大切な社会的行動であると思う」「勉強」
	「楽そうで大変」(各1名)

さらに SCT「家事育児とは」という刺激項目に対する反応に基づいて「表面理解型」と「新・性役割観型」との質的な相違を検討した(表 11)。対象者は、満足度、平等主義的性役割態度得点ともに全体の平均値より 1/2 SD 以上の者とした。表 11 より、「新・性役割観型」では、家事育児は、「夫婦の協力」「家族全員で取り組むもの」との記述がみられた。「表面理解型」でも「共同作業」との言葉は 1 名にあったが、「各々の性に応じた分担がある」といった、性役割に関する表現もあった。それは「新・性役割観型」にはみられなかった反応である。

以上の分析の結果、「妻への理解・支持」が高い場合、満足度の高い夫の方が、満足度の低い夫よりも平等的な性役割観を持つという仮説は支持された(図 3, 表 10, 表 11)。

考 察

本研究ではまず中年期夫婦の夫婦関係満足度の実相について検討した。その結果、低満足度群においては、「妻の満足度が低い」という先行研究の知見が支持されたが、高満足度群においては当てはまらないことが示された。表 2 より、高満足度群においては、妻・夫共に同程度の満足を得ている夫婦が多いことが示唆された。

それに対して、低満足度群では、明らかに妻の方の満足度が低かった(表 3)。また超低群に属する 4 名は、全て妻(女性)であった(表 4)が、彼女らの夫は、普通群 2 名、微低群 1 名、高群 1 名に属していた。これらに代表されるように妻の満足度が極端に低いにもかかわらず、夫の満足度が低い夫婦がいることが示された。

以上より、柏木(1996)などによって指摘された、中年期夫婦は夫の満足度より妻の方が有意に低いという知見は、低満足度群のみに当てはまることであり、高満足度群には該当しないことが示唆された。

次に、夫婦関係満足度高低別に妻と夫それぞれの質的な特徴について考察した。

高群妻

高群妻は 50%もの人が夫のことを「かけがえのない存在」と表現していた。さらに「大切な、良き、最大の、安心できる、」という言葉も多くみられ、夫を代替不可能な存在と捉えていること、夫に対して暖かな気持ちがあることがよく分かる(表 5)。また夫にとっての自分の存在も、「1 番である、必要な人、良き」という言葉で表している。これは夫から愛されている、必要とされているという確信を持っているということであろう。今まで結婚を続けてきたことに対しては、半数以上が「お互いを尊重してきた、信頼してきたから、絆を深めてきたから、愛情があったから」という

言葉で表現している。これは柏木(2003)のいう、結婚の愛情・精神的機能を重視する、妻の求める“新しい結婚”にあたるものである。道具的機能中心の結婚ではなく心理的機能にもとづく結婚といえる。本研究において高群妻には、結婚生活を続けてきた理由として経済力といった道具的機能を挙げているものはなかった(表7)。将来については、「仲良く、楽しみたい」や「助け合い、尊重しつつ、いたわりあえる」といった、これからの生活への期待や、お互いを思いやり共に生きてゆきたいとの記述が特徴的であった(表8)。

高群妻の夫

高群妻の夫は、妻に対して「かけがえのない、人生最良の、代わる人はいないであろう」や「良き、大切な、」等の記述が多いことから、高群妻と同様の気持ちを抱いているといえるであろう。お互いを必要なもの、大切なものと位置づけており、互いに代替不可能性が示されている点からも、お互いを想いあっていると考えられる(表5)。そして配偶者にとっての自分の存在を、「かけがえのない、頼りになる、良い夫」等、高群妻同様に配偶者にとって自分は「なくてはならない存在、大切な存在」であると、確信している記述が特徴的であった(表6)。結婚生活の継続理由については、高群妻が“新しい結婚”にあたる愛情や精神的機能を理由に挙げていたものが半数以上であったのに対して、高群妻の夫は、「互いを認め合ってきた、お互いの信頼」と記述した者は2名のみであった(表7)。この結果もまた柏木(2003)の、“女性の側”でこれまでにない新しい結婚のあり方を求めている、という説を裏付けるものである。将来については、高群妻同様その夫も、「今までと同じように過ごすだろう、死ぬまで一緒、末永く一緒」等の反応が多く、これまでと同様に、配偶者と一緒に人生を歩んでいきたいというポジティブな姿勢が推察された(表8)。

低群妻

低群妻においては、夫のことを「生活資金を出せる人」と表現しているもの、ネガティブな存在として表現しているものが、それぞれ3名ずついた。これは高群妻には一切みられなかった言葉である。また逆に、高群妻にみられていたような、「かけがえのない、大切な、良き」という言葉はみられなかった。低群妻においては、夫はもはや情緒的に必要不可欠な存在ではなく、むしろ「困った人、一緒にいて楽しくない、自分だけが大事」といったネガティブな感情を向ける存在となっている。低群妻にとって、夫は「一緒に暮らすお金を稼ぐ人」という道具的な存在になっていると推察される(表5)。また夫にとっての自分の存在については、「家のことをする人」という反応が最も多かった。これは表5において低群妻が、「私にとって夫は、生活資金を出せる人」と反応している記述と関連するものである。つまり低群妻が夫に道具的価値しか持たないように、夫も妻には道具的価値しか見出していない、と感じている様子がうかがえる。また、「同志、妻であるみたい、共同生活者」という表現はあるものの、はっきりと、「良き、大切な」といった修飾語が使われていた表現は見られなかった。逆に「どうでもいい存在、バカな奴だと思っているかも」というネガティブな表現もみられた(表6)。つまり、低群妻は夫から情緒的に必要とされている、という確信を持っていないと考えられる。

しかしながら、表5より低群妻の夫は、妻に対して「かけがえのない・良い」等と表現している者が多く、妻の思いと、夫の思いはかけ離れたものとなっている。さらに低群妻では、50%にあた

る8名が結婚生活の継続は、「子供がいるから」といった、子供の存在を理由に挙げていた。高群妻でも継続理由に“子供”というキーワードを挙げた人はいたものの、それは1名だけであり、表現も「夫婦円満で、子供が可愛かったから」というものであった。しかし低群妻においては、「子供がいたから、子供に悪影響を与えたくない」といった、「子供のみ」が理由として記されていた。両群の夫婦関係性は質的に異なるものであることが推察される。

さらに、「仕方がないから、収入がないから」といった消極的な理由で結婚生活を続けている者もみられた。低群妻では高群妻のような心理的機能を理由に挙げている者が一人もいないどころか、「忍耐のみだった」という結婚生活が苦痛であったこと、またそれに関わらず、継続しなければいけない理由があったのであろうことを想像させる記述もみられた。

これらの記述を踏まえると、低群妻が結婚生活を継続させる理由は、夫から経済力を得るためと、子供への愛情と責任によるためであると推測される。それは新しい結婚とは程遠い、道具的機能を求めた伝統的な結婚生活といえるであろう(表7)。将来については、「今までと同じように生活していく」との表現もみられたが、「どうなるか分からない、考え直さなければならない、子供が成人したら夫婦でいられるだろうか、どうにかしなくては」と、将来に不安を表す表現が4割強の7名にみられた。その他「互いに干渉せず、仲良く過ごすことに努める」という表現も、高群妻とその夫にはみられなかったものである。彼女らは現在の満足度は低く、夫に対してもネガティブな感情があるにも関わらず、将来を否定していないことは興味深い(表8)。

低群妻の夫

低群妻の夫の50%は、妻のことを「良い人、かけがえのない人、大事、宝」等表現しており、大切に思っている様子が見える。さらに、妻の「生活資金を出す人」に対して、「家事育児をする人」といった、道具的な存在として妻を表現している人は1人もみられなかった。唯一「うるさい人」というネガティブな表現はみられたものの、多くの人が妻を想っている事が分かる。相手の存在に対して、夫婦で深刻なギャップが生じている(表5)。また配偶者にとっての自分の存在については、高群妻の夫に比べて数は少ないものの、妻にとって自分は「必要、柱、なくてはならない、良い」との言葉がみられた。これは低群妻の「私にとって夫は」に対する反応(表5)とは全く異なるものである。また、「?、どうだろうか、経済的支援者、厄介者」といった表現は、高群妻の夫にはみられなかった表現である。夫自身、妻から必要とされていると確信できない、または道具的役割しか期待されていない、むしろネガティブな存在と思われると感じている人もいると考えられる(表6)。

結婚生活の継続理由については、50%以上が「なんとなく、子供がいたから、よくわからない」とは答えているものの、「妻子への愛情、互いの愛情、連帯感、幸福である」といった、全く妻にみられなかった情緒的な理由を挙げている者も存在した。ここでも、低群妻とその夫の間には、大きな違いがみられる(表7)。将来については、「末永く幸福に暮らす、楽しく仲良く暮らす、良い老後を送りたい、共に生活する」との表現が50%にみられた。また「喧嘩をする、よい方向へ向かえばいいと思う」との記述はあったものの、妻のような先行き不安なネガティブな感情はみられなかった。これを高群妻とその夫同様、彼らもこれから先を、幸せな将来として想定していると解釈す

ることはできる。しかし前者では夫婦共に幸せな将来を想定しているのに対して、この夫の妻たち、つまり低群妻はこのような表現をほとんどみられないことは重要ポイントであろう（表8）。

妻が夫婦関係満足度の高群に属する夫婦の特徴としては、SCT 反応全体から相手に対する深い愛情がうかがえたことである。さらに高群妻はその大半が、「信頼」「尊重」「思いやり」といった心理的機能を結婚継続の理由としており、道具的機能や子供の存在のみを結婚継続の理由としたものはみられなかった。これらが低群妻との大きな相違である。

一方、妻が低群に属する夫婦の特徴としては、夫婦の思いがかけ離れていることが第一に挙げられる。なぜここまでかけ離れたものになってしまうのであろうか。超低群妻に属する妻の回答には「サインを出しても気付いてくれない、そのためサインを出すことをやめた」という記述がみられた。夫はサイン自体に気付かない、またはサインが出されなくなったため、その状態が妻にとって不満であるとは思わなくなったのであろうか。また心理的機能を中心とした“新しい結婚”は、低群妻においては実現されていなかった。むしろ道具的機能のみを夫に求めており、結婚の継続理由もそのためであった。それは、道具的価値が必要なくなったとき、結婚を継続させる理由がなくなるということでもある。それは子供が成人した時、夫の経済活動が終焉を迎えた時であり、今日増加している“熟年離婚”ある。さらに問題なのは、彼女らの夫にこの深刻な状況を全く理解していない者がいるということである。

これらより、結婚に高い満足感を得ている女性は、心理的機能が中心となった新しい結婚を実現していることが示唆された。結婚生活において道具的機能と心理的機能の双方を達成することが、高い夫婦関係満足度へとつながっていくと考えられる。これに対して低群妻は、心理的機能をほとんど得られておらず、道具的機能のみが中心であり、心理的機能を得られていないことが、高群妻とは逆の低い夫婦関係満足度へとつながっていくものと考えられる。

中年期夫婦の結婚のあり方のより精緻な類型化とそれぞれの心理力動の分析は、今後の重要課題である。

引用文献

- 平山順子（1999）. 家族を「ケア」するということ：育児期の女性の感情・意識を中心に 家族心理学研究, 13(1), 29-47.
- 堀口美智子（2000）. 「親への移行期」における夫婦関係：妊娠期夫婦と出産後夫婦の夫婦関係満足度の比較を中心に 生活社会科学研究, 7, 81-95.
- 稲葉昭英（2002）. 結婚とディストレス 社会学評論, 53(2), 69-84.
- 柏木恵子（1996）. 結婚・家族の発達の社会心理学：社会変動のなかの家族 発達, 17(68), 53-66.
- 柏木恵子（2003）. 家族心理学：社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会
- 柏木恵子・平山順子（2003）. 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性—妻はなぜ不満か— 心理学研究, 74(2), 122-130.
- 諸井克英（1996）. 夫婦関係満足尺度 吉田富二雄(編) 2001 理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつ

- ながりをとらえる〈対人関係・価値観〉 149-152.
- 最高裁判所 (1995). 司法統計年報
- 菅原ますみ・小野智恵・詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介 (1997). 夫婦間の愛情関係に関する研究(1)~(3). 日本発達心理学界第8回大会発表論文集. 57-59.
- 末盛 慶 (1999). 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感: 妻の性別役割意識による交互作用 家族社会学研究, 11, 71-82.
- 鈴木淳 (1994). 平等的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成 心理学研究, 65, 34-41.